

この業に執念深く取組んでこそ、私の分野の研究に、いささかなりとも貢献し得る仕事が出来そうな気がする。

卒論 雑感 — 近世

谷脇 理史

これまで私に提出された卒業論文は、江戸時代の小説（特に西鶴の小説）をあつかったものがほとんどであるが、他にも近松の世話浄瑠璃をとりあげたものが数篇、中には、長唄の詞章や江戸の庶民氣質を論ずるといった変り種もあった。卒業論文には、自分の最も興味を持てる問題をとり上げるのが最善と考える私には、もっと変り種があつてもよいような感じがするが、これまで卒論を書いた諸君は、意外に正統派であつたようだ。

ところで、近世の小説を卒業論文にとりあげた諸君が最も困るのは、研究文献が非常に少い、ということであるらしい。もちろん、西鶴などの場合、文献目録を見れば明らかのように、万葉・源氏などにはとても及ばないとしても、それ相応に研究文献があるとは云えるであろう。しかし、ある程度テーマをしぼって研究文献を集めようとする、自らの考えようとする問題をとり上げ、立論する上で何らかの手がかりを与えてくれる参考文献が非常に少なく、作品を読めば解るようなときり書いてなくて、ガックリくる訳である。

例えば、一つの作品をとり上げて論じようとする場合、その作品についての様々の見方を提出した多数の文献があれば、それらを比較検討しながら自分なりの問題を設定し、立論して行きやすい訳だ

が、研究の歴史が浅くこれまで十分な作品論が多く書かれているとはいえない場合の多い近世小説をとりあげようすると、他人（これまでの研究者）にたよって一応の形をつけようということが、非常にむずかしいことになる。それ故、幼いなりに自分の立場から綿密に作品を読みこむことによって、ともかく自分の頭で対象とする作品を自分なりに把握して行かざるをえない訳である。

が、考えてみれば、参考文献が少いということは、人のフンドシで相模をとると異なり、ともかくも自分なりの新見を出しやすい訳だから、思い切つてぶちあたれば、時に面白い卒論が書ける、ということにもなる。そのせいか、現在まで私の見た卒論ですぐれていたものの多くは、自分なりに作品を読み込み、何とか自らの立場と論理によって作品を説明しようとしたものに多いようだ。と同時に、研究文献が少ないのに安心して、作品を読み込むことを怠つて書かれたものは、作品の紹介と感想の羅列の域を出ず、何ともサマにならない状態にもなっているようである。

作品を綿密に読み込まずに作品を論じて行くことが基本的に誤りであることは、どの分野にも通ずるすこぶる当り前のことであるが、これまでの研究が十分でない近世小説の分野では、作品を読み込み自分なりに対象を把握出来ているか否かが、そのままよい卒論と悪い卒論の分れ道になっているようである。

卒論 雑感 — 近代

鈴木 亨

学問のさびしさに堪へ炭をつぐ——山口誓子のごく初期の句。大

正十三年、誓子は東大法学部の三年生（当時の大学の学部は三年制）で、高等文官試験を受けるために鋭意勉学中であった。高文試験の成績如何は、そのころの法科系統の学生の将来を決定するものだったのである。貧寒とした下宿で、ひとり外套などひっかぶりながら、埋み火をかきたてている作者の姿が目にかぶる。

数年前、沢木欣一さんの主宰している俳誌「風」が二十周年記念号を編んだとき、諸方面に「近代俳句中の愛誦句」を尋ねるアンケートを發したことがある。その際、請われるままにわたしはこの句をあけておいた。ところが四十名ばかりの回答者のうち、わたしをふくめて四名が同一の句をあげたのだ。万をもって数えられるはずの近代俳句の中から、十名に一人の割で同一句を選ぶというのは、いささか異常である。東京新聞が文芸欄のコラムでさっそくこのことをとりあげ、「興味深い現象だ」とか評していたことを覚えてみる。

要するに当節は、学問するためには物心両面でしのごにくいご時世なのであろう。そのことを暗々裡にみなが感じていて、それがはしなくも如上のアンケートの結果をもたらししたものと思われる。が、学問の世界には、由来この句にみられるようなへさびしき）は

つきものなのである。ただ、昨今のようにお互いに激流にもまれていると、それがことのほか身にひびくというまでにすぎまい。

で、あえて青臭の言辞を弄するなら、学問の府である大学にあっては、常住そうしたへさびしき）が核として存在すべきであるように思う。ところでわたしは、そんな気味を面貌にただよわせた学生諸君を目にするのは、いつも四年のゼミの後期——それも肌寒さを覚えるころだ。もっと具体的にいえば、卒論の執筆にかかりだすこ

ろである。それまでへさびしき）いっぱいだった諸君の顔が、にわか

に曇りだす。

「苦しいかね」「苦しいです」——そんな楽しい会話が、親身に諸君と交わせるようになる。その会話がやがて、「苦しいかね」「でも、すこし楽しい」というふうに変りはじめるのが、十二月の声を聞くころ。そのころには、「もっと早くから取り組めばよかった」「もう二、三年ほしい。そうしたら、もうすこしましなものを書けるようになるかもしれない」といった嘆声も、諸君から洩れるようになる。それは諸君が、真に女子大生らしい美しさに輝く季節である。

そして卒論の完成、提出。面接をすませ、重荷をおろした諸君は口をそろえて、「はじめて勉強をしたような気がします」という。そうして本当の美人になったところで、諸君はそそくさと校門を出ていってしまう。そのくり返し。——ただ思う、そういう沈着で、キラキラしい瞳を輝かす学生諸君に、いつもあふれているべき大学のあり方を。激動・混迷する世情の中にあつては、なおさらに、である。

卒論雑感 — 近代

山崎 一類

今まで三期生（十二名）と四期生（二十五名）の近代文学関係の卒業論文の指導にあたった者として、気付いた事を述べて見たい。

卒業論文のテーマが、カリキュラムで採り挙げた作家研究、作品